

# 主日礼拝説教「どう見られている？」

日本基督教団石神井教会 2017年7月9日

## 【旧約聖書日課】イザヤ書 49章14～21節

- 14 シオンは言う。主はわたしを見捨てられた、わたしの主はわたしを忘れられた、と。
- 15 女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。  
母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。  
たとえ、女たちが忘れようとも、わたしがあなたを忘れることは決してない。
- 16 見よ、わたしはあなたを、わたしの手のひらに刻みつける。  
あなたの城壁は常にわたしの前にある。
- 17 あなたを破壊した者は速やかに来たが、あなたを建てる者は更に速やかに来る。  
あなたを廃虚とした者はあなたを去る。
- 18 目を上げて、見渡すがよい。彼らはすべて集められ、あなたのもとに来る。  
わたしは生きている、と主は言われる。  
あなたは彼らのすべてを飾りのように身にまとい、花嫁の帯のように結ぶであろう。
- 19 破壊され、廃虚となり、荒れ果てたあなたの地は、彼らを住まわせるには狭くなる。  
あなたを征服した者は、遠くへ去った。
- 20 あなたが失ったと思った子らは、再びあなたの耳に言うであろう、  
場所が狭すぎます、住む所を与えてください、と。
- 21 あなたは心に言うであろう、誰がこの子らを産んでわたしに与えてくれたのか  
わたしは子を失い、もはや子を産めない身で、捕らえられ、追放された者なのに  
誰がこれらの子を育ててくれたのか  
見よ、わたしはただひとり残されていたのに、この子らはどこにいたのか、と。

## 【使徒書日課】使徒言行録 4章32～37節

<sup>32</sup>信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。<sup>33</sup>使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。<sup>34</sup>信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、<sup>35</sup>使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。<sup>36</sup>たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ——「慰めの子」という意味——と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、<sup>37</sup>持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。

## 【福音書日課】マタイによる福音書 6章22～34節

<sup>22</sup>「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、<sup>23</sup>濁っていれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう。」

<sup>24</sup>「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

<sup>25</sup>「だから、言っておく。自分の命のことで何を食うか何を飲むかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。<sup>26</sup>空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。<sup>27</sup>あなたがたのうちたれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかも延ばすことができようか。<sup>28</sup>なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのが、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。<sup>29</sup>しかし、言っておく。榮華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。<sup>30</sup>今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。<sup>31</sup>だから、『何を食うか』『何を飲むか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。<sup>32</sup>それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なものをご存じである。<sup>33</sup>何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。<sup>34</sup>だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

## 「空の鳥を見なさい。野の花を見なさい」

「空の鳥をよく見なさい」。「野の花がどのように育つのか、注意してみなさい」。

主イエスは、この御言葉を、窓を閉め切った部屋の中でお語りになられたのはありません。野外で、広々とした山の上で、大勢の人々が思い思いに腰を下ろして教えるに耳を傾ける中、お語りになられました。

いわゆる《山上の説教》と呼ばれる箇所です。主イエスは、しばしば野外で、大勢の人に向かってお語りになられたのです。静かに風が吹いていたかもしれませんが。鳥のさえずりや動物の鳴き声、通りすがりの人々の発する音が、主イエスの声を遮ってしまって、うっかりすると聴き逃してしまう、ということもあったのではないのでしょうか。あるいは、心地よい眠気に襲われる者も少なくなかったのではないのでしょうか。けれども、主イエスは、家や会堂の内ばかりでなく、ときに好んで野外で、この世界のさまざまな造られたものと触れ合うことのできる場所で、お語りになられたのです。

そのとき、ちょうど、空に鳥が行き交ったのかもしれませんが。一羽だったのでしょうか。何羽も群れて飛んでいたのでしょうか。主イエスは、空に向かって目を上げ、その鳥を指差されながら、お語りになられたのに違いありません。「**空の鳥をよく見なさい**」。

そのとき、一陣の風が吹きつけて、野原を埋め尽くした草花がそよいだのかもしれませんが。聖書には、「**シャロンのばら、野のゆり**」(雅歌 2:1) という表現があります。主イエスの目に飛び込んできた野の花は、バラだったのでしょうか、ユリだったのでしょうか。物の本によると、チューリップやシクラメンの仲間の花だったとも考えられるようです。いずれにしても、野原には、美しく装われた野の花が、いくつも咲いていたのでしょう。「**野の花がどのように育つのか、注意してみなさい**」と、主イエスがお語りになられると、腰を下ろしていた大勢の人々は、お互いの間で、可憐に、しかし逞しく咲いている花々に、一斉に目を向けたことでしょう。

日曜日の昼食というのは、教会の礼拝にお集まりの皆さんにとっては、少なからず関心の的のようです。今日は午後、全体懇談会が予定されていて軽食が用意されていますから、悩む必要はありませんが、そうでないときは、「さて、今日のお昼はどうでしょうか」「だれと一緒に食べようか」「どこのお店がよいかしら」と、礼拝の最中に、気もそぞろ、頭の中を思い巡っている、などということがあられるのではないのでしょうか。あるいは、ご家族をご自宅に待たせている主婦であれば、帰ってすぐに用意できるようにと、段取りまで頭の中で整理して、礼拝終了を待ちわびるようにお帰りにならなくてはならない、という現実があるのかもしれませんが。日曜日に限りません。「**何を食べようか何を飲もうか**」と思い悩むのは、毎日のこと。そんなわたしたちに、主イエスは、おっしゃられます。

「**何を食べようか何を飲もうかと…思い悩むな。…空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥**

を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。

食べ物のことに比べたら、着る物のことは無頓着という方は、案外いらっしゃるかもしれません。今朝、着る物を誰かに用意してもらって着てきたという方は、ほとんどいらっしゃらないでしょうが、あまり深く考えずに決まった服を着てきた、という方はあると思います。もちろん、着る物のことに無頓着ではられない方も多いでしょう。特に、日曜日の教会に何を着ていくのか、悩まれる方もいらっしゃるでしょう。昔は「日曜日の晴れ着」という言い方がありました。日曜日には一番よい晴れ着を着て教会の礼拝に出かけるものだったようです。前任地で百歳まで礼拝に出席されていた姉妹が、土曜日に必ず美容院に行つて髪を整えていらしかったことを思い出します。それはそれで、最上のものを用意することで思い悩む必要のない習慣だったのかもしれませんが、最近は、むしろそういう習慣が廃れてきたからこそ、皆さん悩むことがあるのかもしれませんが。どんな装いで礼拝に出席したらよいか。はじめて教会においでになろうとお電話でお尋ねくださる方の中に、そういうことを気になさってお尋ねくださる方もあります。けれども、そんなわたしたちに、主イエスはおっしゃられる。

「なぜ、衣服のことで思い悩むのか」。

## 思い悩まない

「思い悩むな」、それよりもまず「神の国と神の義を求めなさい」と、主イエスはおっしゃられます。

九州の小さな初任地の教会で、転任前のクリスマスの祝いの最中に亡くなられ、ご葬儀をさせていただいた姉妹のことを、今日の御言葉を聴き直しながら、わたしは思い起こしています。日曜日の聖壇の献花を一手に引き受けていらして、亡くなる四カ月ほど前まで、必ず土曜日に教会に来て、丁寧にお花を活けてくださっていた方でした。20歳で教会の門を叩き、洗礼を受け、65年にわたってその教会の信徒として生きられた姉妹でしたが、とても苦勞の多い人生を送られた方でもあったのです。早くに両親を亡くされ、高等女学校を出られるとすぐに、幼い弟妹たちを養うために働き始められました。初めの結婚は、とても難しい結婚でしたが、二度目の結婚は、これ以上の方はないと思われるほどのお相手でした。ところが、そのご主人は早くに亡くなられてしまわれた。しかも、財産を一切残されることもなかった。姉妹は、何もかも失ってしまったとの思いを抱かざるを得なかったのですが、そのとき、教会の女性牧師が尋ねてきて、言われたというのです。「思い悩まないで、何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」と。それを聞いて、姉妹は、「そうか」と思ったか。思えなかったのです。「この先生は、何を言っているんだ。わたしは何もかも失って、途方に暮れているのに」と。けれども、その姉妹は、教会から離れることはありませんでした。信仰を捨てることはありませんでした。「何を言っているんだ」と思った御言葉を、それでも胸の内に留め続けて、生きていく決心をなさったのです。いいえ、決心して生きていくことができるように、神は、確かにその姉妹を生かし、

養い、美しく装い続けてくださったのです。

その姉妹は、最晩年までしばしば、思い悩みを牧師に打ち明け続けられた方でした。けれども、その方の存在は、田舎の小さな教会にとっては、大きな存在だったのです。礼拝のたびに、教会の仲間たちは、その方が毎週活けてくださる聖壇の献花に目を向けるのと同じように、決まって礼拝堂の一番前の席に座るその姉妹の後ろ姿に、目を向けていました。「空の鳥を見なさい」「野の花を見なさい」とおっしゃられる主イエスが、その教会の人たちには、「この姉妹を見なさい」ともおっしゃられている。わたしは、そう思わないではいられなかった。

### **あなたの中にある光が消えないように！**

主イエスは、わたしたちが本当に何に目を向けて生きていけばよいのかを、お教えくださっているのです。「空の鳥」、「野の花」、あの姉妹をご覧なさいとおっしゃられて、それを通して、わたしたちが最終的にどこに目を向けて生きていけばよいのかを、お教えくださっている。

まず目を上げて、わたしたちを本当に生かしてくださっているお方が生かしてくださっているものに、目を向けるのです。わたしたちを本当に養ってくださっているお方が養ってくださっているものに、目を向けるのです。わたしたちを本当に美しく装ってくださっているお方が美しく装ってくださっているものに、目を向けるのです。その一つひとつと同じようにこのわたしをも本当に生かし、養い、美しく装ってくださっているお方が、確かにいらっしゃるではないか！

今夜はちょうど満月です。月は、いつも半分だけ太陽に照らされているのです。その照らされている半分がすべて地球を向けば、満月になる。その満月の光は、しかし、もともと月の持つ光ではない。太陽の放つ光です。自分では少しも光を生み出していなくても、月は、あんなに明るく光る。太陽の光をまっすぐに受けとめて照らされた姿を、隠さずわたしたちに見せているのです。

わたしたちは、神の光を受けとめることのゆるされた器です。光の源である神が、確かに生かし、養い、美しく装ってくださっている器なのです。そのことを、わたしたちは、自分自身をいくら見つめても、確信することはできません。自分の心に目を向けても、そこにあるのは「思い悩み」や暗闇ばかりです。主は、だから、「見よ」と、わたしたちが目を上げることを求められるのです。自分ではなく、周囲に目を向けることを、求められるのです。そこに、神が生かし、養い、美しく装ってくださっているものが、どれほどたくさんあるか。天の父の光を受けた器が、どれほど輝いて存在しているか。その光の源をたどって行って、天の父にまでわたしたちの目が向けられるならば、わたしたちは、神の光を受けとめることができる。自分の中に何ら光を生み出すものが無くても、光ることができる。神の光を、周囲の人にまでもたらすことが、できる。

信仰は薄く、小さくてもよい。ただ、自分を見つめることばかりに縛られている目を、外に向け、すぐ目の前のものに向けるのです。神の光の中に生かされている隣人や被造世界を見るのです。その照らされた光が、このわたしをも照らし

出してくれています。このわたしも、神の光を照らし、証しする器なのです。